

# アフリカのホモ・エレクトスが 作成した旧石器の時代的変遷

東京大学 総合研究博物館 教授  
**諏訪 元**



## 研究の背景

ホモ・エレクトス(いわゆる「原人」)は180万年前ごろにアフリカで誕生し、その後ユーラシア大陸へ拡散し、60万年前ごろまでに旧人段階の人類へと進化します。その原人時代に特徴的な石器が「アシュール型」石器であり、「ハンドアックス」などの大型石器によって知られています。従来最古のものは150万年前ごろとされ、100万年前以後にはアフリカ、ヨーロッパからインドまでの広い地域から知られています。主として、動物の解体道具と推測され、その作成には高度な階層認知能力が必要と思われる。近年、幾つかの調査地から150万年前より古い「アシュール型」石器が報告され、我々もエチオピア南部のコンソの調査地で発掘・採集してきました。コンソの調査地は、アシュール型石器の最初期から100万年前以後の時代の石器が産出する世界でも稀な調査地の一つですが、年代層序が一部複雑で解決できないままでした。今回は火山灰層序、古地磁気層序、<sup>40</sup>Ar/<sup>39</sup>Ar年代測定などについて新たな分析を加え、並行して石器群集の系統だった比較解析を進め、コンソ調査地のアシュール型石器の時代的変遷の大枠を明らかにすることができました。

## 研究の成果

コンソの最古のアシュール型石器は約175万年前ごろと結論でき、近年「世界最古」として発表されたケニアの例と同時代です。粗雑な石器性状も双方で類似しています。今回の成果により、アシュール型石器が東アフリカで180万年前ごろに出現したことが強く示唆されました。ホモ・エレクトスの起源との同期性について、従来から議論されてきましたが、今回の結果は同期説を支持する新たな成果です。また、最初期のアシュール型石器の特徴を世界でも初めて



図1 エチオピア南部コンソ調査地の175万年前の最古のアシュール型石器遺跡。

明らかにすることができました。石器形状は粗雑ながらも二つの特徴を新たに特定できました。一つは大型剥片を元素材とすることによる長い刃部の作成で、これにより片面加工の簡単な「ハンドアックス」や「クリーバー」が作成されていました。もう一つは、重く分厚く尖った「ピック」が卓越していることであり、掘具か木材分断のための道具であったかもしれません。

時代的変遷をみると、100万年前ごろまでは加工技術に若干の発展が見られるものの、ハンドアックスは厚く成形されるままでした。それが85万～90万年前の層準になると、加工による薄化が意図的に行われていたことが統計解析から示唆されました。この新たな技術革新は従来考えられていたよりも古かった可能性が示され、原人から旧人段階への進化との関連について新たに興味もたれます。

## 今後の展望

コンソの調査地は200万～100万年前の間の人類の進化適応様式と古環境的背景の記録を豊富に産出しており、今後も継続的に出土資試料の比較解析と分析を進める必要があります。アシュール型石器のより詳細な成果報告も進行中であり、動物相や堆積物の同位体組成の評価解析と共に今後進める予定です。

## 関連する科研費

平成14-15年度 基盤研究(A)「東アフリカ鮮更新世の古環境と人類進化に関する研究—コンソ遺跡群を中心に—」

平成24-28年度 特別推進研究「ラムダス化石等人類進化研究を中心としたマクロ形態研究の推進と基盤充実」



図2 ハンドアックスの形状の時代的変遷(右下から左上に175万、160万、125万、85万年前)。